

# 世界一の魔法使い系 ヒーローを目指すヒー ローアカデミア II

シド・ブランドーMk—IV（地底の住  
人）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ひよんなことから魔力という個性を持ってヒロアカの世界に転生した翔流。

しかし、魔力はあっても魔法は使えなかった。そんな中、至高の魔術師であるDr. ストレンジに声を掛けられた。

Dr. ストレンジのおかげで様々な世界の魔法を身につけることが出来た翔流。今度はその力を使ってヒーローを目指す。

翔流はその力で困難に立ち向かうことが出来るのか!!

# 目次

雄英を受験する	1
雄英初日、個性把握テスト	13
屋内対人戦闘	26
屋内対人戦闘後編	そして、忍び寄
る影	50
悪夢の襲来	59



# 雄英を受験する

久しぶり！天野翔琉です。今僕はこいしちゃんと一緒に雄英高校の門の前に来ています。

その前に質問？

何故雄英高校の門の前に居るのかつて？

そんなの受験するために決まってるじゃん？

え？何故こいしちゃんが居るのかつて？全ての記憶を思い出させてくれた俺のヒロインだからだよ！

正直ぞつこんだよね！もうこいしちゃんと出会って生活できてるってことだけがもう幸せ！

もう落ちてもいい！最悪向こうの世界でアベンジャーズに入ったらいいし！

あ…でもあの人たちは職業じゃないのか…。じゃあダメだ。

でも神様ありがとう！この恩は一生忘れない！あなたのとこの宗教に入るよ！

宗教の名前知らないけど！

あ、許可してくれたさとりさんや紫さんにも感謝しないとね！！

おっと、話が逸れちゃた。幻想郷について2日後くらいだったかな？霊夢や魔理沙と出会って色んな魔法を教えて貰っていたのに記憶は全く戻らなかったんだけどさ、こいしちゃんを見た時、頭に雷が落ちてきたような感覚に陥ったんだ。もうそこで全ての記憶を思い出したんだよね。

何を言っているのか分からないだろうけど、俺も興奮しすぎて何言ってるのか分からないよ。

さあ！やって参りました実技試験！筆記試験はまあまあできてたと思う。落ちることとは無いんじゃないかな。今はマイクの説明を聞いてる最中さ。

『受験生のリスナー達！今日は俺のライブによるこそー！』

「Yeaaaaaa！」

もちろん返事をしているのは俺ら2人だけである。ほかの人たちから変な目で見られてるけど気にしない！ぶっちゃけこいしがいなかったら俺も返事してなかったと思う。

『センキュー！カップルのリスナー！じゃあ今から今から実技試験の説明を始めるぜー！アーユーレディー!!?』

「Y E A A A A A A A A A A !」

『またまたセンキュー！各自配られたプリントを見てくれ！』

「ねえ翔琉。みんな変な目で見てたけどなんで？」

「あー、あれだ。みんな緊張してるんだよ。まあでもこういうのは楽しんだもん勝ちだと思ってる。周りの目は気にせず好きにやっておいで。」

「りよーかーい。」

『他に質問はあるか？じゃあこれで説明は終わりだ！じゃあ各自着替えてそれぞれの演習場に向かってくれ！』

「じゃあこいし。試験が終わったら校門前で集合な。お互い頑張ろうな。」

「了解。絶対うかるうね！」

「おうー！」

がぜんやる気出た。これはもう受かってこいしと学生生活送るしかないわ。

その時の受験者たちの心はほぼーだった。

『『『バカップル死ね!!』』』』

——演習場にて——

——翔流サイド——

「(身体能力強化系のスキルはかけたからバッチリ。あとはスタートの合図を待つのみ！)」

『ハイスタート!!』

開始の合図と同時に僕は動きだした。

「禁忌！『フォーオブアカインド』！」

僕はフランのスペルを発動させながらロボットに向けて走り出した。

「僕は真ん中行くから、2人は左右に別れて！ロボット倒したり、倒れたり怪我してる子助けて！あと0ポイントが出てきたら0ポイントの前で集合！」

「了解!!」

——本体サイド——

「炎よ 巨人に苦痛の贈り物を!!」

僕はステイルの炎の剣を出しながら仮想敵に向かっていった。

剣先が触れた瞬間、紙のように切断され爆発した。

こうなることは予想済み。摂氏3000℃だよ？　こんな装甲の物が耐えられるわ

けないよね。



そんな脆い奴らを炎剣で次々にバツタバツタと危なげなくなぎ倒して行つた。

3ポイント10体            2ポイント15体            1ポイント25体

今のところ合計で85ポイントか。

……85ポイント!?    本体だけで!?

いやあ、……これは予想外。敵感知で見つけやすいとはいえちよつとやりすぎ?

あ……あの子足引きぎずつてるな。怪我してんのか? 治してやるか。ていうか後ろ危ねえ!

「そのの怪我してる子しやがんで! 後ろからロボット来てる!」

「まじ!? ……やばッ!!」

「フリペンド!! 吹っ飛べ!」

「標的、ブツコロ……(ドンッ!)」

セーフ!

呪文が当たった瞬間に仮想敵は飛んでいった。

「いやー、危なかつたね。大丈夫だった?」

「うん。大丈夫。ありがとう。……でも足が捻挫しちやつて。」

……って、よく見たら耳郎ちゃんじゃん!

「了解。……ヒール! ……どう? もう治つたでしょ?」

「凄っ！ほんとありがとう!!これでまた点数稼ぎに行けるよ！」

「こんなに真っ直ぐお礼言われると照れるなあ。」

「良いってことよ。お互い無事受かるといいね。」

「そうだね。…次は教室で！」

「おう！」

……我ながら青春してんなあ。前世なら絶対無かったもんな。まあ、その記憶があるから今回行けただけかもしれないが。こいしに会った時はマジで思い出さたくないくらいテンパってたからなあ。

本体である俺はそこからはレスキューポイントに専念することにした。

治してあげたり手助けしながらレスキューポイントも20ポイントくらい溜まったかなって所まで来た。

その時だった。

ドンツ！ドンツ！と大きな音が近ずいてきた。

来たな。0ポイントの大型仮想敵!!

……うつわ。思ったよりデッカ!

まあ、最後は爆裂魔法をぶっ放して汚ねえ花火で終わらせようか。

『紅き黒炎、万壞の王。天地の法を敷衍すれど、我は万象昇温の理。崩壊破壊の別名なり。永劫の鉄槌は我がもとに下れ！』

詠唱を始めた瞬間、0ポイントの上に大きな魔方陣が4つ現れた。

…そして、

『エクスプロージョン!!』

ドーン！

という音とともに0ポイントがいたところに黒煙が立ち上る。

《試験、終了了!!》

「終わったー！これは自信しかない。」

——こいしサイド——

「たしか、司会者みたいな人がロボットを倒して点を取っていけって言ってたよね。」

そんなことを考えながら会場を歩いていたら

『標的…ブッコロス!!』

横からロボットが現れ殴りかかってきた。

「あれ？もしかして気付かれてる？…よつと！」

「もう。いきなり危ないなあ。それッ！」

ロボットはゴンツ！という音とともに吹っ飛んでいった。

「…あー飛びながら倒していったら効率良いかも！」

そこからは流れ作業だった。演習場を飛びまわりロボットを見つけたら弾幕を飛ばす。

あつという間に1000ポイントは超えた。

実技試験終盤、こちらでも0ポイントが現れた。

「うわあ。本当におつきいねえ。」

「これもやってみよつか…『グロウインググペイン』!!」

この技は茎でつながった大きな薔薇がたくさん出てきて攻撃するものだ。その大きさは平均的な人間の上半身ほどの大きさがあ、その薔薇が0ポイントの顔面に直撃し

ていった。

その直後、ロボットの顔面がズタズタになり、動かなくなった。

「試験 終了了！」

「妖力で出来た薔薇は痛かろう……てね！」

——教師による実技審査——

「今年の受験生は豊作でしたね。」

「そうね。1位と2位の子には差はつけられてしまってるけど、救助ポイント0で3位の子。そして、反対に敵ポイント0で10位の子。途中までは不合格者の典型的なあれだったけど最後に0ポイントを倒して救助ポイントを手にいれて合格。」

「0ポイントをぶっ飛ばした時は思わずガッツポーズしながら叫んじまったぜ！」

そう言うって再びガッツポーズしたのはプレゼントマイク。

「だが、パワーを制御出来ずに自壊するのは良くないな。マイナスポイントだ。」

そう厳しい評価をしたのはイレイザーヘッドだ。

「そこを制御出来るように導くのが俺たちの仕事だろ？」

そう擁護したのはブラドキングだ。

「まあ……それはそうなんだが。」

「それよりも1位と2位のカップルリスナーだろう！なんだあの個性と強さ！もしかしたら俺らよりも上なんじゃねえの？って思っちゃったよ！」

「確かにあの強さはやばいわね。並のプロヒーローじゃ勝てなさそうね。」

「ええ、資料を見た限りかなり強力ですよ。」

「1位の名前は天野翔流。個性は『魔力』。様々な道具を使って魔力を引き出し、様々な現象を起こす個性。そして2位は古明地こいし。個性は『無意識』と『妖力』。」

「無意識と妖力？どっちも皆目見当つかないな。」

「『無意識』は相手に認識されずに行動できる個性。視界に入らない限りは認識されないという個性です。何らかの理由で注目が集まると効果が薄まるそうです。弱点としては機械のセンサーなどには引っかかる、だそうです。」

「隠密系のヒーローになればかなり強力ね。でも妖力ってどういうこと？」

「私自身もちやんとした理解は出来ていませんが、恐らく0ポイントに放った薔薇や、その他のロボットに放っていたハート型の弾のようなものだと思います。」

「個性についてはわかったわ。でも1つ気になることがあるんだけど。」

「何でしょう。」

「『魔力』と『妖力』の違いって何？見た限り違いが分からないんだけど。」

「調べた限りの情報ですが良いですか？」

コクコクとみんなが頷くのを確認すると、

「魔力とは魔法を使うための力で、体力のようなものです。妖力も似たようなものです。妖怪が怪異を起こすための力をさすそうです。」

「つまりこの子は妖怪の個性ってこと？」

「ええ。その通りです。皆さんは「さとり」という妖怪をご存知ですか？「さとり妖怪」とは人の心を読む妖怪のことです。写真を見てもらえれば彼女に閉じた瞳があるのが分かります。本来この目は「第3の目」、サードアイと呼ばれており、心を読むための目だそうです。彼女のお姉さんも同じ個性を持っていましたが、心を読まれるのを周りから嫌われており、彼女は嫌われるのが嫌で第3の目を閉じてしまったようです。その結果、瞳を閉じた彼女は周りから認識されなくなり、個性が「無意識」に変化したそうです。」

「ただ、自分では無意識を制御することが難しいらしく、放浪癖があるそうです。」

「これも私たちが導いてあげなきゃいけない案件ね。」

「みんな古明地さんの方に寄ってしまっているけど、天野君はどうなのかな？」

「校長、お疲れ様です。今から説明する予定でしたが、正直に言うとうと魔力と道具を使って現象を引き起こすという以外何も分からないんです。実技試験でやっていたのが全力なのか、それともまだ本気じゃないのか。できることが分からない現状、入学させて少

しづつ調べていくしかありません。」

「分かったよ。じゃあ相澤くん。天野君、緑谷くん、爆豪君、古明地さんの4人の面倒よろしくね。」

「…分かりました。」

「みんなもそれで良いかな？」

「「「異議なし！」「」」

「じゃあ他の生徒の合否も決めなきやね。」

雄英の教師たちは、しばらく徹夜だったそうだ。



## 雄英初日、個性把握テスト

やつほー。

僕とこいしは今、1-Aの扉の前にいます。

今日は入学式だ。(入学式には参加しないけど。)

ちなみに実技試験の結果は僕とこいしでワンツー合格だつてさ。

こいしも100ポイント超えてたし、僕なんて200ポイント超えてたんだつて。歴代最高らしいよ。オールマイトに褒められた。やったね！

まあ、分身してたからね、仕方ないね。

あ…体育祭の時代表で喋らないといけないじゃん、だつる。

教室に入ると誰も居なかった。流石に7時半は早すぎたか…気合い入りすぎたよ。

「ねえ、どこに座ればいいの？」

「ああ、座席表が教卓かどっかにあるはず。」

「…あー机に名前が書いてあるよ！」

「ほんとだ。自分の席探そっか(…隣同士だったら最高だなあ。)」

「うん。…あ、あつたよ！隣同士みたい。」

「マジで!？」

うおー！マジで隣じゃん！しばらく華の学園生活だな！

そこから座ってなんやかんやしてる間に、欲望のままに膝枕してもらうことになりました。学校で膝枕とか青春しすぎだろ。

これはたから見たらやべえ光景じゃね？

峰田あたりがみたらやべえことになりそう。(白目)

…知らんけど。

やべえ。眠くなってきた。

「ねえこいし、先生が来るまで寝かせてよ。」

「良いよお。…私も寝よつかなあ。」

Yes!Yes!Yes!

「じゃあ一緒に寝よつか。おやすみ」

「おやすみい。」

そして僕は誘われるままに夢の中へと入っていった。

——しばらくして——

「——に足をかけるな！先輩方や作ってくださいった方々に申し訳ないと思わないのか

!!

…騒がしいな。

「思わねえよ！テメエどこの端役中学だア？」

「なんか重要なイベントのような気がする。…でもこの状態から立ち上がれないや。こつちの方が大事。」

「ほ…俺は聡明中学校出身だ！」

「ああ、これあれだ。かつちゃん和飯田くんの初めての掛け合いのやつだ。」

「聡明イ？クソエリートじゃねえか！ぶつ殺しがいるな！」

「ぶつ殺しがいい！酷いな君！本当にヒーロー志望なのか！」

「なあ、実技試験の説明会でわかってたけどさ、あの2人神経図太すぎね？よくこんなうるさい中で寝れるよな。」

「という声が聞こえてきた。…いや起きてるよ。この声は切島くんかな？」

「そうだよねえ。ほんともう、嫉妬を通り越して微笑ましくらい青春してるよねえ。」

「これは芦戸さんの声かな？お褒めの言葉ありがとう。」

「リア充ほんと消えろ！3年間これに耐えろつてのわ！…無理だよ！」

「知らんよそんなこと。これは峰田の声だな。」

「お友達こつこがしたいなら他所へいけ。…こはヒーロー科だぞ。」

相澤先生のご登場みたいだ。

「——はい。皆さんが静かになるまで8秒掛かりました。君たちは合理性にかけるね。…僕は相澤消太。君たちの担任だ。よろしくね。」

((((担任!)))

って今頃びつくりしてるんだろなみんな。

「とりあえず1人1セット体操服あるから。それ着てグラウンド集合。時間もつたいないからはよな。あと、その2人誰か起こしといてくれ。…じゃ。」

「おーい。そこのお2人さーん。起きてー!グラウンド集合だつてさ!」

「…ハッ!寝過ぎした!起こしてくれてありがとうね。」

「良いって良いって。それよりさ、2人が出会った時のこと今度教えてね!」

おい何中要求してんねん芦戸さんはよお。

「良いよー!」

…何でOK出しちゃうかなこいしさんは。

「それより早く彼氏さん起こしてくれておいでよ、あの担任合理的主義みたいだから。」

「OK!翔流く、起きてく〜!…このまま立っちゃおつかなあ。3…2…1…」

「はいすいませんでした!」

「よろしい。体操服着てグラウンド集合だつてさ。」

「了解。…じゃあ着替えて行こっか。」

——グラウンドにて——

「全員揃ったな。…今からみんなには体力テストを受けてもらう。」

「先生！入学式やガイダンスは!?!」

「…最もな意見だな。合理的主義なら教室であの説明しとけばいいのに。」

「ヒーローになるにはそんなの出る暇もやる暇もないよ。…体力テストと言っても個性アリの体力テストだ。確か1位は天野だったな。試しにボール投げをしてもらう。線から出なきや何してもいい。はよな」

「…クソッ!」

「……。」

先生が僕を指名した瞬間、かっちゃんに罵られたし轟くんには睨まれた。

…これはかっちゃんや轟君からライバル扱いされる展開かもしれない。

まあいいや。

僕はポケットの中からリングを取り出した。

そう! Dr. ストレンジ師匠達が持つてるあれ!

「なんだ? サポートアイテムか?」

「指輪型のサポートアイテムか？珍しいな。」

「…チツ！（サポートアイテム使ってるやつに負けたのかよ。）」

まあ、そんな反応になるよね。舌打ちはある意味予想内。

だって何しても舌打ちしてきそうだもん。あの子。

「スウー…ハアー…（テレポート！）」

結局テレポートにした。リングは所謂ブラフというやつである。

「…距離、8キ。」

「8キ?!あいつ何したんだ！」

「投げるどころかなんの動作もしてなかったぞ！」

「ていうかあれ手のひらから消えてなかったか？」

「またもや様々な反応が来た。」

「うくん？（なんの個性なんだろ。私が助けてもらった時は明らかにロボットを吹っ飛ばしてたし怪我也治してもらった。そして今度はテレポート?…本当になんの個性なんだ?）」

「静かに!…これから君たちには今みたいな感じにすすめてもらおう。」

おっと、これは最下位除籍なしの流れなのでは？

「俺からは以上だ。迅速に取かれ。」

ほんとに無かった。

「なあなあ、これって思いつきり個性使えるってことだよな!!」

あ…。

「ほんとだ! すぐえ楽しそう!」

あゝあ…さっきのはフラグだったか。思っても口に出しちやいかんでしよう。

「ちよつと待て。誰だ今楽しそうって言ったやつ。君たち3年間そんな腹積もりで居るつもりなのかい?…だったら、最下位のやつは見込みなしとして除籍しよう。」

あゝあ。結局最下位は除籍ちなるのか…。最下位が除籍にならない平行世界つてどれくらい確率なんだろうか。

「ちよつと待つてください! いくらなんでも除籍なんて理不尽すぎます!」

そうだそうだ、もつと言つてやれ。意味無いけど。

「この世には災害や敵の襲撃なんて理不尽、いくらでも起きてきたし、今後も起きるだろう。そして、ヒーローはそんな理不尽立ち向かつて行かなければならない。学生生活の間、我々は君たちに困難を与え続ける。プルスウルトラだ。…全力で乗り越えてこい。」

やつば為になる話だね。

僕もピーターの手伝いしてたからわかる。…理不尽がすごい!

——メートル走——

「蛙水さん、これからよろしくね」

「よろしくね、天野ちゃん。梅雨ちゃんと呼んで。」

位置について

よーい、スタート!!

蛙水…5. 58秒

天野…3. 00秒

「すげえ！あいつ空飛んでるうえに速え！」

「レポートできて空飛べるうえに速えなんて万能すぎじゃね!？」

「凄く速いのね、天野ちゃん。」

「ありがとう、梅雨ちゃん。」

「ねえ天野ちゃん。貴方の個性ってなんなのかしら？」

まあ、そう思うよねえ。…なんて答えよ。

「うーん…時期が来ればみんなに話すよ。それまで待ってて欲しいかな。」

「ケロケロ…わかったわ。」

「…いいしも空飛んできた。」



結果は4. 3秒。

「あつちも空飛べんのか!!」

「…ハア!リアルに2人で空飛ぶ旅が出来んのかよ!羨ましすぎんだろ!!」

「…確かに羨ましい。」

「私のアイデンティティが!!」

——握力——

障子君の540kgはともかく、八百万さんの万力はやべえだろ。ずるすぎるだろ。

……まあ僕もドーピング（バフ）するから同類か!

天野…:240kg

こいし…:150kg

—立ち幅跳び—

「先生!! 僕（私）たち飛べます!」

「すげえ息びつたりだな」

そんなほめないですよ。照れるじゃん。

「どれくらい飛べる?」

「「疲れるまで!」」

「…無限だ。」

「マジか!!とうとう無限出しやがった!」

・・・どやあ。

——反復横跳び——

「これなら俺の右に出るやつはいねえ!」

と豪語し、個性を使って凄まじい速度で反復してた。

だが残念だったな峰田よ。その上を僕は行く。

「禁忌! 『フォーオブアカインド』! (そして、それぞれにバフをかけていく)」

「反復横跳びやるぞ!」

「「おー!」」

「今度は増えた?! :てことは古明地の方も!!」

残念、こいしは普通にやっています。

「よかった。普通にやってる:いやちげえ!! 分身とか勝てるわけねえじゃん!!」

「どんまい峰田。あれは勝てない。」

「ちくしよー! っていうかあいつの個性何なんだよ! 万能すぎだろ!」

——持久走——

「先生、ちよつといいですか?」

「なんだ？」

「僕、魔力があつて飛行魔法だけなら半日は飛べると思うんですが（小声）」

「…分かった。お前と古明地。君たちは無限だ。」

よっしや！走らなくても飛ばなくても済む！

「ええ、みんなと走つてみたかつたなあ。」

と、不満そうないし。…まじでか。

上体起こしは反復横跳びみたいに分身とスピードのバフでトップをとつて、長座体前屈は普通にやつた。…意外に体が硬えわ。

梅雨ちゃんは舌伸ばしてた。…やっぱ適材適所なんだなつて。

「んじゃ、ぱぱつと結果発表。」

1人凄い顔してる。この世の終わりみたいな顔。言わずもがな緑谷くんである。安心しろ緑谷くんよ。君は見込みありだ。

「ちなみに除籍は嘘な。君たちに全力を出させるための合理的虚偽」

「「ええええええええ！」」

「うそおお！」

「そんなの嘘に決まつてるではありませんか。ちよつと考えれば分かりますわ。」

「ちよつと待つんだ八百万さんよ。」

見ててくれこいし。俺の素晴らしいトーク力を！

「なんですの？天野さん。」

「君は今相澤先生の『最下位は除籍』を嘘に決まってるって言ったね。」

「ええ。相澤先生も嘘だと仰っていたではありませんか。」

「うん。でもね、相澤先生は嘘にしたんじゃないかなって考えてる」

「どういうことですか？」

「先生がその時言ったセリフを覚えてる？先生はこう言っていた。『最下位は見込み無しとして除籍にする』つまり、緑谷くんは最下位だったけどは見込みがあったから除籍にしなかったんじゃないかな？」

「な、なるほど……」

「逆に言えば、最下位じゃなくても見込みがなければ除籍にしてたんじゃあないかな。」

「…ですよ、相澤先生。」

「こいしは……見てねえ！それどころか個性把握テストの結果に興味すらいつてねえ！

「ハア……そういうことだ。これからも精進しろよ。見込み無しと判断すれば即除籍対象になるからな。」

「じゃあ、もう今日はここで解散だ。はやく着替えてさっさと帰れよ」

「……はい！」」

「…天野さん。凄いですわね。流石主席ですわ。そこまで考えが及びませんでしたわ。私もまだまだだということですわね。」

「ありがとう、八百万さん。これからよろしくね。」

「はい。こちらこそよろしくお願ひしますわ。」

「…チツ！」

なんか舌打ちが聞こえてきた。

1人は性欲の権化みたいな峰田くん。もう1人は自尊心の塊な爆豪くんだ。

—— 帰り ——

「ねえ、こいし。初めての学校は楽しかった？」

「うん！凄く楽しかったよ！それに、私の事忘れないでくれそんな人達がいっぱい居そうだったから嬉しかった！」

「そう思ってくれて何よりだよ。…そうだ！今日の晩御飯は何がいい？」

「うん…そうだ！入学祝いって行事やってないよね！豪華なお肉料理が良いな！」

「よっしゃ！気合い入れて作るぞ！そうと決まれば食材買いに行かなきゃな！」

## 屋内対人戦闘

今日の午後は待ちに待った初の戦闘訓練の日だ。

僕のコスチュームは黒くてローブが足まで届くパーカーにパステル入れやカード入れが付いたものだ。いかにも魔法使いが着てそうな

そしてこいしはいつもの服に耐火性能などを付けたやつ。

可愛い。

「始めようか、有精卵ども！ 戦闘訓練の時間だ！」

「先生！ここは入試の演習会場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか！」

飯田君は相変わらずだね。

「いいや！もう二歩先に進む。屋内での対人戦闘訓練さ!!…敵退治は主に屋外で行われるが統計だけで言えば凶悪敵は屋内に潜んでいる確率が高いんだ。」

こつち（ヒロアカの世界）とあつち（マーベルの世界）じゃやっぱ違うのかな。凶悪敵でも高確率で外で暴れてる方が多かったから感覚が向こうによりすぎた？

「監禁・軟禁・裏商売！このヒーロー緩和社會、真に賢い敵は屋内に潜んでいる。そこで

だ！君たちにはこれから「敵側」と「ヒーロー側」に分かれて2対2の屋内戦闘を行ってもらう。」

なるほどなあ。確かに向こうの世界は凶悪敵もヒーロー側も少なくてヒーロー社会とは言えないもんなあ。

「基礎訓練もなしに？」

「その基礎を知るための実践さ。ただし、今度はぶっ壊せばOKなロボじゃないのがミソだぞー！」

その瞬間、生徒たちから様々な質問がオールマイトに飛んでった。

その内容は、「ぶっ殺していいのか・除籍はあるのか・ペアはどうなるのか・マント格好良くない？」とかだ。

明らかに最後のおかしいでしょ。もはや質問じゃねえ。

「（んんんんん！！聖徳太子！！）：いいかい？状況設定は「敵」がアジトに「核兵器」を隠していて、「ヒーロー側」はそれを処理しようとしているんだ！ヒーロー側は制限時間内に「核兵器」に触れて回収するか「敵」を捕まえるんだ。反対に敵側は「核兵器」を制限時間まで守り切るかヒーローを捕まえたら勝利とする。コンビおよび対戦相手はくじだ。」

「適当なのですか？！」





…星マーク？

とりあえず相方は…葉隠さんか。

「葉隠さん！よろしく！」

「天野君も星マークなの？こちらこそよろしく！」

1回戦

緑谷くん&麗日さん vs 爆豪くん&飯田くん

結果は散々だった。爆豪くんは単独行動で緑谷くんに突撃。そして緑谷くんはそれに応えて結果的に建物を半壊させた。

「先生！緑谷くんのこと治してあげにいつても良いですか！」

「…！許可しよう。」

「ありがとうございます。あと、ここ周辺から離れていてください。」

「分かった。」

「緑谷くん。…治療するね。」

「天野君！…うん。お願い。」

ついでに3人とも回復させてあげよか。約1名から罵倒されるだろうけど。

「了解。…ハイネスヒール！」

そう唱えると緑谷くんやほかの3人にあつた傷や骨折がみるみるうちに無くなって

言った。

「す、凄い！ありがとう！天野君！」

「うわ！私たちのまで治ってる！」

「ほんとだ！天野君、感謝する！」

「いいっていいって。どういたしまして。」

素直に感謝されると嬉しいな。……ここから地獄パートだけど。その前に、

「みんなのところに帰るよ！ テレポート！」

「うわ！びっくりした！」

「もしかして、ボール投げの時もこんな感じで飛ばしてたの！」

「ExacTory（その通り！）！」

「ですわよね！天野さん！先生！」

……え？

「う、うん。その通りだと思うよ。」

「あ、ああ。まだあるが概ねその通りだ。」

ほら、オールマイトも若干困惑してんじやん。

「立派なヒーローになるには日々精進有るのみですので。」

お、おう。立派なことだよな。

## 第2回戦

轟君&amp;障子君（ヒーローチーム）

vs

尾白君&amp;こいし（敵チーム）

## 作戦会議

「ねえ、古明地さん。僕の個性は見ての通り尻尾なんだけど、君の個性ってなんなの？空を飛ぶ個性？」

「違うよ。」

「え、違うの？個性把握テストのとき、空を飛んでたからってつきり空を飛ぶ個性なんだと思ってたんだけど。」

そう思うのは無理はない。個性把握テストでは空を飛んでいただけなのだから。

「私の個性はね…」

——モニタールームside——

「さつきはありがとう、天野君。」

「良いっていいって。」

「ところで、1つ聞きたいんだけど。」

「ん？なんだい？」

僕の個性の事かな？

「古明地さんの個性って空を飛ぶ個性？」

まあ、聞かれるよね。

「空飛ぶ個性以外有り得なくね？だって個性把握テストでもとんでたじゃん。」

「僕も最初はそう思ってた。でも、あのプラグのようなものに繋がってる閉じた瞳は何なのかって…まるで、最初からあったけど機能は停止しています。って感じで全然違和感ないんだよね。本当の個性はその瞳に関係するもの何じやないのかな？」

「やっぱり色んな人の個性を研究してる人は違うなあ。ほぼ当たってるよ。」

「いや、いくらなんでもそれは……」

「その推理、概ねあつてるよ。緑谷くん。」

「マジでか!!」「すげえ!」

ほんとそれ。緑谷くん凄すぎ。

「彼女の本当の個性は…『無意識』」

「無意識…ですか?」

「そう、無意識。」

「無意識?…どんな個性なのか全く想像できねえな。」

「まあ、無理もないよ。僕も最初はよく分からなかったからね。無意識とは、相手の無意識を操り他人に全く認識されずに行動できる個性。」

「相手に認識されずに行動出来るのか!!チートだろ!」

まあ、認識されないってだけだし、こっちの世界は機械が発達してるからね。そこまでチートじゃないかも。そう言おうとしたら

「アホか。ちつとは頭使えや。人の無意識を操って認識を捻じ曲げてんだろ。ならよ、機械のセンサーとかには引つかかるってことだろ。機械があんま発展してなかった時代ならともかく、現代じゃあ使はずれえ個性だな。」

「正解だよ爆豪くん。幼なじみコンビは頭の回転が速いね！」

「あいつと一緒になんない！」

「なるほどなあ。対人戦はめっぼう強いけど、センサーとかがある建物の侵入には使えないってことか。」

「その通りだよ。あとは、何らかの理由でこいし自身に注目がいった場合、その効力は薄まる。」

「…でもよ、最初に緑谷が言ってた閉じた瞳にはなんの関連性もなくね？」

「ごめんね。そこはあの子にとっても結構デリケートな過去なんだよ。だから、みんなにそのことを話すかあの子と相談してからでもいいかな？」

「分かった。…なんかごめん。」

「いいのいいの！話すまでこいしの前ではそのことに触れないようにしてくれればいいから…それより始まるよ！こいしの勇姿をとくとご覧あれ！」

「ほんと、親ばかだなあ。．．いや、彼女ばかか？」

「そんなもんどつちでもいいわ！妬ましい事には変わんねえんだよ!!」

誉め言葉だよ。

「峰田、そろそろ慣れとけよ。そうじゃないと3年間耐えられないぞ」

——いし&尾白君side——

「なるほど．．．無意識か。ありがとう。古明地さん。」

「いいよ。絶対勝つよ!!」

『敵チーム、準備はできているか?』

「できてます。」

「準備OKだよ!」

『分かった。．．．戦闘開始!!』

——轟君&障子君side——

「三階に1人いるな．．．すまん。もう1人の場所がわからん」

「謝るのはこつちだ。危ないから下がってる。わかるわからないの前に動かなくなるかな。すぐ終わらせる」

そういうと轟君は建物を氷でコーティングした。

「す、すごいな。確かにこれなら殺さない程度に拘束できる。…だが、先日の個性把握テストで古明地が飛んだの見てたろ。これを予想して飛んでいるんじゃないのか？」

たしかに障子君の推理は間違っていない。

「確かにな。だが、2対1なのは変わりない。」

「変わりはしないが向こうは飛んでいる。轟はともかく、俺の場合滑る床は弱点になってしまふ。注意することにはないだろ」

「…わるい、確かにそうだな。注意して行こう」

——3階、核兵器のある部屋——

「クツ…ヒーローめ！小癩な真似を！」

「案の定1人いないか」

演技を無視される尾白君可哀想。

「だが、もう終わりだ。おとなしく核を回収されるんだな」

「核は絶対に渡さんぞ！」

「そうか…だがもう遅い」

と、歩き始めたとき。Pr r r r, Pr r r r…と電話の音が鳴り響く。

「は？こんな時に電話？…もしもし」

なぜこういう時人間は受話器をとってしまうのか

『私メリーさん。今屋上にいるの。ツ…ツ…』

「メリーさん？屋上？どういうことだ？」

p r r r r … p r r r r …

「またかよ…もしもし」

『もしもし、私メリーさん。今4階にいるの。ツ…ツ…』

「…！おい、障子！今あいつがどこにいるのか確認しろ!!」

「分かった！…やっぱりだめだ。どこにいるのか皆目見当もつかない。多分、風や音を立てないように移動しているんだ」

「チッ！…やっぱりだめか」

p r r r r … p r r r r …

「……。」

『もしもし、私メリーさん。今扉の前にいるのツ…ツ…』

「…！おい、扉の向こうだ！…慎重に開けてみてくれ。油断するなよ。」

「分かった。」



そういいながら扉を開けたが、誰もいなかった。

「…轟、廊下には誰もいないぞ。本当に扉の前って言うってたのか？」

…ガチャッ

『障子少年！アウトだ！』

「…は？」

「(ナイスだよ古明地さん。…何処にいるのか全く分からないけど！) お前たちは彼女の  
ことを知らなさすぎた。」

「…なんだと？」

P r r r r r r r r r r r r r r r r

『もしもし、私メリーさん。…今。貴方の後ろにいるのツ！…ツ！…』

「…！」

轟くんは慌てて後ろを振り向くが、そこにも居なかった。

「残念。…こつちでした！」

…ガチャッ

『轟少年確保！敵チームの勝利！』

「さあ！今回のMVPは誰か分かるかな？」

「は「はい！尾白さんか障子さんですわ。」

クソッ！…取られた！しかもこいしじやねえし！

「それはなんですか？」

「確かに凍らされたのは良くありませんわ。ただ、古明地さんの個性をフルに活かすためにわざと自分に意識を持つていくようにしていたのは良かったと思います。障子さんは個性を活かして相手の位置を探ろうとしていた。古明地さんも個性をフル活用して2人とも捕まえてたのはよろしいのですが、なぜ電話なんかを？」

「んー？私が怖いなって思う敵を演じてみたんだけどなあ。だつてね！怖くない？緊迫した状況に知らない電話番号からの電話！とつたら見知らぬ声！内容をよくよく聞いてみたら自分に近づくの！」

うん、可愛い。相手がとることを前提にして取らなかつたことを考えてなかつたこいし。…可愛い。

「確かにそうですが、轟さんが電話をとらないとは思わなかつたんですか？」

「…（考えてなかつた。）その時はその時かな!!」

「考えていなかつたんですね。…コホン。対して轟さんは自分の個性に信頼を置きすぎですわ。それに相手は飛ぶことが個性把握テストの時に分かっていた。なら、避けられることも考えるべきでした。その場合、障子さんへの負担も同時に考えるべきでしたね。」

「(また言われた!) …う、うん。その通りだ。」

そして、最終戦、僕たちの出番だ。

「さあ、最終試合はE Xステージだ! 天野少年、葉隠少女! 戦いたい相手と敵側かヒーロー側かを選んでくれ!!」

「私はどっちでもいいよ。天野くんは?」

「ここは色々仕掛けられる敵側一択かな。」

「じゃあ敵側で。」

「うむ! じゃあ戦いたい相手はいるかな?」

誰でもいいかな。結果は変わらないと思うし。

「僕是谁でもいいですよ。むしろ僕たちと戦いたい人います?」

「調子乗ってんじゃないやねえぞデメエ!! 俺がぶっ潰してやる!」

「1人は爆豪少年か。後1人、誰かいるかな?」

「俺(私)がやります(たいですわ)」

「2対2だからどっちか譲ってくれないか?」

「僕は3対2でも大丈夫ですよ。」

「ええ! 私が困るよ!」

「大丈夫。そうなつていざとなつたら助けてあげるから。」

「ええ、…それなら良いけど。」

「決まりだね。オールマイト先生。3対2でお願いします。」

「良いのかい!? 凄い自信だね!! じゃあ、5人とも建物に向かつてくれ。先程同様、着いた5分後から開始とする」

「……」

「…チツ!」

——天野&葉隠 side ——

「こいしにかつこいいとこ見せるために! 頑張るぞ!」

「(天野君、魂胆が見え見えだなあ。) 天野君、顔に出てるよ?」

「え?…まじ?…コホン。じゃあ葉隠さん、核兵器を屋上に持って行つてくれないかな。」

「了解! 天野君はどうするの?」

「僕は色々仕掛けしていくからさ。」

「わかった。じゃあ屋上でね。」

そうして僕は葉隠さんと別れて、色々な仕掛けを施していった。  
名ずけて!

ホームアローン作戦！

——モニタールーム——

「ねえ古明地さん。」

「なあに？ もじやもじや君。」

「もじやもじや君?!…いや、天野くんの個性って何なのかなって。個性把握テストの時はテレポートしたり分身したり、そして今回は怪我を治してくれた。その中に一貫性が全くないんだ。だから、個性は何なのかなって」

「なるほどお。翔流の個性はねえ、…『魔力』だよ。」

「魔力?」

「…:…それってあれか? ゲームとかでよくあるなくなったら魔法を出せませんよっていうMPのことか?」

「そう! それだよ! そのMPを使って魔法を操る個性!」

「真のチートはあっちだったか。」

確かにそれだけ聞くとただのチートだ。

「でもね、翔流曰く、中学になって先生に会うまで魔法を全く出せなかったらしいよ」

「何でかしら?」

「もしかしてだけど、出すための魔力はあってもそれを出すための技術が分からなかつ

たんじやないかな。」

「その通りだよ。」

「……てことは、たった3年間であそこまで出来るようになったのかよ。才能マンじやなくてかなりの努力マンだな。漢だぜ！」

「だがよ、それならヒーロー側の方が有利なんじやないか？」

「それは違うよビリビリ君!!」

「ビリビリ君で…俺の名前は上鳴電気な」

「ある地域ではね、才能の無い者、つまり、ここで言う無個性の人達かが才能がある者(個性がある人)に追い付きたいという願いのもと作られた技術が魔術や魔法なんだって  
!」

「才能の無い者が、才能がある者に追いつく為の手段…」

「そう!個性って色んなものがあるでしょ?攻撃型、防御型、回復型とか!それらを再現したものが魔術や魔法なんだよ!それを、個性『魔力』として体现したのが翔流の個性らしいよ。」

「なるほど、だからやろうと思えば攻守どっちでも大丈夫ってことか。」

「そういうことね。……もう試合が始まりそうよ。その努力や技術は試合で確認するこ

とにしましよ。ケロケロ」

——天野&葉隠 side——

「ねえ天野君。本当に屋上でよかったの？」

もつともな質問だ。

「大丈夫だよ。色々仕掛けてきたから。：名付けて、「ホームアローン楽しんでね」作戦

！」

「もしかしてネーミングセンスない？」

「グサツ！…あとは3人がここに来るまで紅茶でも飲んでケーキでも食べて雑談でもし

とこうか」

僕はそう言いながら自分の家から机や椅子を含んだティーセットを取り出した。

「ええ！それどつから出したの!？」

「ん？自分の家からだよ。：何食べたい？チョコケーキ、ショートケーキ、モンブラン、

チーズケーキがあるけど」

「うーん。：じゃあチョコケーキで！」

「はい。」

「ありがとう！……じゃないよ！呑気にこんなことしててもいいの？」

「まあ、そのことも含めて話してあげるからさ、落ち着いてよ、何かあった時のために屈

折魔法、所謂透明化をかけとくからさ」

「…なら、良いのかな。でも、あの3人に失礼じゃない？」

「……確かに。ならティータイムはお預けだね。」

仕方ない。僕は全部家に戻した。

『葉隠少女！天野少年！準備はいいかい？』

「はい！」

『うむ！…試合、開始！』

「さてと、どこから話そうか。」

「じゃあさじゃあ！下で何してたのかと個性教えてくれない？」

「いいよ！」

——爆豪&轟&八百万side——

「スタートしてみたんだな。…どうする？」

「俺は真正面から行く！てめえらは反対側からまわれや！」

「待つてください！葉隠さんはともかく、天野さんの個性は未だ謎ですわ！」

「うっせえ！接敵してから分析すりゃあ良いだろうが！」

「…行つちまったな。反対側から行くか。」

「そうですわね」



そう言つて反対側に回ろうとした直後、2回から大きな物音とガラスが割れる音がした。

後ろを振り向いたら先に入っていたはずの爆豪が外にいた。

「…チクショー!」

「爆豪、何があつた。」

「2階の廊下を歩いてたら急に壁がこつちに向かつてきたんだよ!んで窓から放り出されたッ!クソがッ!」

「だから言いましたのに。天野さんの個性は謎だと。」

「チッ!…てめえらもせいぜい気をつけるこつたな。」

今後とこそ彼らは別れて探索することになった。

——轟&八百万side——

「轟さん、ダメです。鍵が開いている部屋が少なすぎますわ。開いていても何も無い空間だけです。」

その時、轟があることに気が付いた。

「……なあ、なんで鍵もついてない引き戸が開かねえんだ?」

「……これは、もつと慎重に動かなくてはなりませんね。彼にとつて人数差なんて本当に些細なものかもしれませんわ。」

この後、2人はこの事実をもっと深く考えるべきだったと反省する出来事が起こった。

それは、

「轟さん。こっちの部屋は開いていますわ。中に入りますわね。」

「こっちもだ。何かあるか分かんねえから気を付けろ」

「ええ」

——八百万side——

そつと扉を開けると、そこには誰も居なかった。

「こっちもハズレですわね。私たちは誰と戦ってますの？」

そう思い足を踏み入れた瞬間、

「こ、……これは……」

足元が光だし、大きな物音を立て床が崩れた。

「きゃー……」

……気付くとそこは檻の中だった。

——轟side——

やはり轟が入った部屋も、もぬけの殻だった

「あいつら……何処にいるんだ？」

部屋に入った瞬間、他の部屋から大きな物音と叫び声が聞こえてきた。

「…八百万!!」

慌てて八百万が入っていった部屋に行ってみると、そこには大きな穴があり、八百万が檻の中に閉じ込められていた。

「すみません轟さん。私たちが思っている以上に気を付けなければいけませんでした。」

「こうなったのは仕方ない。…何があった?」

意外に紳士! 轟君!

「部屋に足を踏み入れた瞬間、足元が光だしたんです。気付くと床が崩れていて、1個下のこの階に落ちてました。そして、地面に触れた瞬間、またしても光だし、檻ができていたんですわ。」

「聞いている限りじゃ八百万、お前に非はないな。俺が同じ状況でもそうになっていたと思う。」

「優しいんですね。…!そうですわ!床が崩れる前、魔法陣のようなものが浮かび上がったんですの。恐らく天野さんの個性は魔法使いかそれに類似した何かだと思います!」

「なるほど、魔法系統か。何が出来るのか全く分からないが厄介なのは確かだな。…だが、このままでは接敵すら叶わず終わっちゃうな。何とかして場所を見つけ出さない

と。」

「なら、一刻も早く爆豪さんと合流するべきですわ。」

「ああ、そうだな。…行ってくる。」

——一方その頃、天野と葉隠は——

雑談していた。

「へえ！天野君の個性つて色んなことが出来るんだねえ！…じゃあねじゃあね！あの3人がこつちに来る気配が全くないのは何でなの？」

「それはね、このカードだよ。」

そう言いながら僕は葉隠さんにルーンのカードを見せてあげた。

「このカード何？」

まあ、知るわけないよね。

「ルーン文字だよ。…ルーン文字には1つ1つに意味があり、それを組み合わせることによつて様々な魔法や魔術を扱うことが出来る。」

そう言いながら炎を出したり炎剣を出したりして見せた。

「すごい凄い！…じゃあ今回来ないのはどんな魔術なの？」

「今回はね、人払いのルーンさ。」

「これを貼つたところに近付けさせないってこと？」

「そういうこと！葉隠さんも飲み込みはやいね。今回は屋上に上がってくるための階段付近と一応扉の前にも張ってるよ。」

本当にヒーロー科のみんなは飲み込みが早い

「さてと、そろそろヒーロー達にちよつかい出しに行きますか。」

そう言いながら僕は特性のチョコレートを取り出した。

## 屋内対人戦闘後編

## そして、忍び寄る影

「さてと、そろそろヒーロー達にちよつかいだしとしますか！」

そう言いながら僕は特性のオイルパステルを取り出した。

「そのクレヨンで何するの？」

「それはね……こうするのさ！」

そう言いながら僕は床に沢山の文字列を書き始めた。

「……え？」

まあ、無理もない。いきなり床に文字を書き始めたら変人以外の何者でもない。

「さあ！泥臭いゴレムの目玉達！僕のために笑って使い尽くされな！」

そう唱えると、その文字達が一斉に巨大な目玉に変化した。

「うわ！なにこれ!?凄いいけどなんか気持ち悪い!!」

「さあ！爆豪くんと轟君を監視しておいで！」

そう唱えると目玉たちは一斉に下の階へと降りていった。

「天野と葉隠もそうだが、爆豪は何処にいるんだ。さっさと合流して敵チームを捕縛しなきゃいけないのに。」

そう考えていると、背後から大量に視線を感じた

「……誰もいねえな。一刻もはやくしねえと接敵すらせずに負けちまう。」

——爆豪 side——

本日4度目の屈辱を受けていた。

「(クソツ！格下だと思ってたクソナードが俺に勝ちやがった！ポニテの言うことが正しいと思っちゃまった！半分野郎には適わねえと思っちゃまった！) ……クソがつ！今度は接敵すら出来ずに負けんのかよ！」

その直後、轟と同じように背後から大量の視線を感じた。

「誰だツ!!…(気の所為か?…いや、大量に感じて気の所為なわけねえ！あいつだ！あいつがまた何かしてきやがった!)」

——No side——

『後ろだよ。ヒーロー諸君。君たちの感は間違っちゃあいないさ。』

「は？(アア?)」

2人が振り向くと、大量の目玉がこちらを覗き込んでいた。

「なんだ…これ…」

「気持ち悪い趣味してんな!!おい!」

『気持ち悪いだなんて失礼だな。』

「……………」

気持ち悪いとは思ったが口には出ていないはずだ。

『それよりも、随分と苦戦してるみたいじゃあないか。あと数分でタイムリミット。この街はドカン!さ。僕達は今屋上にいるからさ。はやくおいでね。それじゃあまた屋上で』

その言葉を最後に大量の目玉たちは無くなった。

「敵に居場所教えるたアいい度胸じゃねえか!」

爆豪に対し、轟の反応は全く違っていた。

「…屋上って選択肢が全く出てこなかったのは何でだ?」

——屋上——

「そうだ。あの2人が来るまでに結界を貼つとかなくちや。」

「何で?」

「爆豪くんは突っ込んでくるだろうし、轟君は扉開けた瞬間氷をぶっぱなしてくるかもしれない。」

「なるほど!例えば氷が貼られても結界があればそれ+氷がバリケードになるんだね!」



「ほんと、理解するの早すぎね?」

——屋上前——

残り数分のところでようやく2人は合流できた。

「おい半分野郎!! テメエ今まで何処にいやがった!」

「それはこつちのセリフだ。…多分お前と同じ状況だったと思う。あいつが仕掛けたトランプを避けるのに必死で探す暇なんてなかった」

「…チツ! 俺があいつをぶつ潰す! 開けた瞬間氷ぶつばなんかしたらあいつより先にテメエをぶつ飛ばすからな!」

「分かった。…開けるぞ」

だが、そこにも誰も居なかった。

「屋上にも居ねえじゃねえか!」

すると、どこからともなく翔流が現れた。

「いや、居るよ。」

「テメエ! やつと出てきたな! 散々俺らをおちよくりやつて!」

「戦闘員としては2対1だ。諦めろ。」

「数で圧倒してみせるって?…ヒーロー、残念だったね。ここに来た瞬間、君たちの負けは決定している。」

そう言うのと僕は笛を取り出し吹き始めた。

「…なんだ…これ…」

「…意識が」

—数分前—

爆豪達が階段と扉の前で言い争っていた時

「そうだ葉隠さん。」

「どうしたの？またなにか仕掛けるの？」

「そのつもりなんだけどね、葉隠さんは『ハーメルンの笛吹き男』って童話知ってるかな？」

「うくん。…昔読んだことはあるけど名前しか覚えてないよ？確か、ハーメルンっていう街が題材だったよね」

「そうそう。ざっくり説明すると、ハーメルンっていう町にネズミが大量に表れて、街の人たちが笛吹の男性に報酬出すから追い払ってくれて依頼したんだ。その男性は快く了承して笛を使って追い払ったんだけど、街の人たちは報酬を払わなかった。それに怒った笛吹男は町の子供たちをネズミと同じようにさ攫ってしまった。…っていう話だよ。」

「へえ…でも、その話と今と何の関係があるの？」

「今ね、その笛吹男がやった手段を洗脳と解釈して、それを魔術で再現するための術式を構築中なんだ。」

「凄いね!!魔術ってそんなこともできるの!?!」

顔は分からないけど、表裏のないであろう声。嘘偽りがないってのはつきり分かる。

「ありがとう。…でもね、まだまだ不完全なんだ。吹いている間じゃないと効果がな  
いってことと洗脳対象を細かく設定出来ない。」

「…だからこれを僕が笛を取り出したら付けてよ。完全防音の耳栓。それで、2人が洗  
脳にかかったなって思ったら手錠を付けて欲しい。」

「わかったよ!…でも、こんなもので防げるの?」

「うん。もう1つの弱点として、音色に術式を組み込んでいるから、耳が聞こえない人  
は効果がないんだ。」

「OK!」

—そして現在—

「(2人が洗脳にかかりはじめた!手錠をかけるのは今!)」

ガチャツ…ガチャツ…

『轟少年!爆豪少年!確保! よって敵チームの勝利!』

「…ハア。いや、ナイスだったよ葉隠さん!」

「いやいや！礼を言うならこつちだよ！私なんて最後手錠をかけただけで何もできてないもん！それに、天野君が分身してたらそれこそ何もすること無かったよ！」

「…え？」

…あ、完全に忘れてたわ。これってもしかして器用貧乏ってやつじゃね？

「…テメエ！何しやがった！」

「最後のは洗脳みてえなもんか…」

「うん。そうだよ。とりあえずみんなが待ってるからモニタールームに行こうか。：おっとその前に八百万さんの所に行かなくちゃ」

—モニタールーム—

「さあ！今回のMVPは誰か分かるかな？」

「先生！天野君だと思います！」

「理由は分かるかな？」

「はい！5分間という短い間に様々なトラップをしかけ、八百万君を檻に入れ、最後には何をしたのかは分かりませんが2人の気を逸らし、見事2人に手錠をかけることに成功しています！…しかし天野君！何故2人に自分達の居場所を教えたんだ？そのままいけば接敵すらせずに勝てたはずだ。」

「確かに飯田君の言う通りだ。でもね、悪役を演じてみたかったんだよ。」

「ん？どういうことだ？」

「よくあるじゃん？タイムリミットが迫ってきて調子乗った敵がヒーローを煽って居場所教えちゃうやつ…あれをやりたかったんだよ。」

「だ、だが、これは訓練だぞ！」

「そう、これは訓練だ。なら、色んな形のヒーローや敵を演じたつていいんじゃないかな？そうすればヒーローになった時でも、『あの時の訓練の状況に似ているぞ！こういう時はこうすれば良いと先生が言っていた！』って対処することができるでしょ？」

「な、なるほど。色んなパターンをつくり、指導してもらうことで将来に役立てるんだな  
！」

「そゆことそゆこと。」

「（や、やばい！もう限界）…さあ2人とも！そこまでだ！授業が終わるぞ！他にも言いたいことはあったが仕方がない。気になることがあれば明日相澤くんに聞いてみてくれ。それじゃ！」

行っちゃった。

「…じゃあ、着替えに行こか」

—— side ——  
???

「やあ、ドクター。オールナイト用の脳無はあとどれくらいで完成するんだい？」

『もう少しじゃ先生。そんな急かすでないわ。』

「そりゃあ急かしたくもなるさ。オールマイトをどれだけ痛めつけられるかが楽しみで仕方ない！」

「…この世界の裏社会の覇権を握る者よ。我々が居ればそんなものは必要ない。」

『「…誰だい（じゃー！）」？』

「私はアスガルドのロキだ。」

## 悪夢の襲来

朝のホームルーム時、教室はなんとも言えない緊張感が流れた。

「今日のホームルームは少し特別なことをやってみよう。それは……」

我々の担任、相澤消太のいう特別なことが少しみんなの中でトラウマになりつつあったのだ。そりゃあそうさ。入学初日に最下位除籍なんていう先生の特別なことなど、何を言われてもおかしくなかったからだ。

「学級委員長を決めてもらう。」

「「「学校つぼいのキターー！」」」

その思いはいい意味で裏切られ、生徒たちは思わずそう叫んだのだった。

そして、

「はいはい！俺やる！」

から、

「僕の為にあるやつ」

やら

「俺がなったら女子のスカート丈30cm!」

などよく分からない立候補をしてる奴もいた。

「みんな静粛に! やりたい人がやれるものではないだろう! ここは公平に投票で決めようじゃないか!」

「時間内に決めればなんでもいいよ。 : : じゃ俺は寝るから。後はよろしく。」

—— 昼食時、職員室にて ——

「おい黒霧、さつさとヒーロー科のカリキュラムを探すぞ。」

「わかりました。」

うんうん。予定通り来てるみたいだな。そして屈折魔法を使ってる僕のことには気付いていない : : と。

怒られないように分身して相沢先生のところへ報告しに行かなきゃね。

そして僕は、3人に分身した。

「写メ撮ってからの( )ちよつとちよつとあんた達、何やってんのさ。破損に不法侵入、その上窃盗。自分たちが悪いことやってるって自覚ある? 今なら逃げたって言い訳してあげるから盗もうとしてるもの諦めて帰った方がいいと思うよ?」

「もう気付かれたのか!」

「 : : フツ。ガキ、俺たちは敵だぞ。はいそうですかかって大人しく帰るわけないだろ。」



だよ。そんなんで帰ったらなんで敵なんかやってんだって話だもんね。  
「じゃあ悪いけど、拘束させてもらおうよ！」

―その頃、雄英高校ゲート前―

相沢先生たちはマスコミの対処に追われていた。

僕はその相沢先生の後ろに姿くらましで現れた。

「相沢先生！」

急に後ろから現れた僕を見て、マスコミたちは騒ぎ始めたが、今はそんなの関係ない  
「…天野か、なんだ。いまマスコミの対処で忙しいんだ。あとにしてくれ。そもそも勝  
手に個性は使ったらだめだろ。」

「そんなこと言ってる場合じゃあないんだって!!…職員室に敵が現れたんですよ。僕の  
分身が相手しています。はやく来てください。」

「…!!分かった。マイク、いったんここは任せる。職員室に用事ができた」

「え!!…マジで!!」

「マイク先生、よろしくお願いします。」

―職員室前―

僕は、職員室に入る前に注意事項を説明しておいた。

「先生、手短に言います。僕の分身体はいま奴らと戦っています。もしやられたら急い

でそっちの方に行ってください。生徒がやられたのに先生が心配しないなんて違和感ありまくりなんです。あと僕の個性は奴らにテレポートだと認識されています。」

「分かった」

―職員室内―

「…おい黒霧、さっさと探せ。俺はこのガキを殺す。」

「無視してるんじゃないよ！」

そう言う俺は姿くらましで敵の後ろに回り込む。

「無視なんかしてねえよ。…ところでお前、自分以外はテレポート出来ないのか？自分以外のものもテレポート出来たら勝ち目はあったのにな。まあ、触っちゃったから、もう関係ねえけどな。」

そう言われた途端、触られたところから身体が崩れ始めた。

「…な、なんだこれ!!」

「…見分かりました！例のものです。」

「クソども！そこまでだ！」

ナイスタイムミングだよ相沢先生。

「…？誰だ？あのヒーロー。」

「アングラ系ヒーローのイレイザーヘッドです」

「ふうん……まあ今はいいや。残念だったなヒーロー。お前の大切な生徒はもうすぐ死ぬ。もし俺たちを捕まえたとしてもこのガキの命は助からん。」

「せん……せい……すみま……せん。」

「今はゆつくり休め。あとは俺がなんとかしてやる」

「ありがとう……ごさいます」

「覚悟しろよクソども。」

結果的にはあの2人は逃がしてしまった。

相沢先生が2人の個性を消したまでは順調だったが、机や机の上にあったものを投げられ目を閉じてしまい、そのすきにワープで逃げられてしまったのだ。

「いやあ、すごい演技でしたね、相沢先生。プロも顔負けですよ。」

「そんなこと褒められてもうれしくない。」

さすがにそこ褒めてもでないかあ。

「それに、戦ってる姿もかつこよかったです。」

「ハア……そんなとつてつけたようなもので褒めても響かんぞ。それより、俺が来るまでの間、何があったのか放課後に説明してもらおう」

「あ、やつぱりだめかあ。先生クールですねえ。……わかりました。放課後職員室によりますね」

そうは言ったものの、相沢は内心少し喜んでいた。

—その日の放課後—

「ごめんこいし。僕ちよつと職員室に用事あるから待つててくれない?」

「私も着いていつちやダメなの?」

…反則だよ!! 良いよつて言いたくなつちやうよ!!

でもダメなんだよ! 分身とはいえ彼女に向かつて舐めプしたら負けましたなんて言えるわけないじゃん! それに心配もかけたくないし!

「ごめん。かなり大事な話だから。」

「む…分かった。じゃあ教室で待つとくね。」

「ありがとうね。じゃあちよつと行つてくるわ。」

「行つてらつしやうい」

—職員室にて—

「コンコン…失礼します。相澤先生、今日の出来事を話しに来ました。」

「…分かった。校長室に行つててくれ。」

そこから僕は校長室に移動して、校長先生も交えて「敵が来たこと・その個性、何があったか」など相沢先生が来るまでにあつたことを全て話した。

「5本の指で触つたところを崩壊させる個性とワープの個性か。かなり厄介だな。」

「情報提供ありがとう天野くん。∴相沢君に知らせたのもグッジョブだったよ。あと、何が目的だったのかはわかるかな？」

「すみません。何が目的だったのかはわかりません。あるプリントを手に入れていたのは確認できたんですが、あいづら、例の物としか言っていなかったもんで∴」

「ありがとう。プリントだったということが分かっただけでも絞れるよ。今日はもうお帰り」

「はい。失礼しました」

そしてその後、僕はこいしと何事もなく家に帰ったのだった。

―敵地―

「聞いてくれ先生、時間割を手に入れるどころか、無謀にも立ち向かってきたヒーロー科の生徒一人を殺ってきたぞ！」

「よくやったな甲。これでヒーロー側の信用も落ちる。」

先生と呼ばれる人物は、自分の生徒が目的以上の成果をあげたことに喜んでいた。

4人はその事に喜んでいたが、どのニュースにもその情報が乗ることは無かった。

隠蔽工作なのか、そもそも死んでいないのか、それを確認する手段は当日まで無かった。

——ある日の朝——

そして今日、レスキュー訓練が行われる日がやってきた。

一応意味ないと思うが相澤先生に忠告だけしておこうと思う。

「相澤先生。今日のヒーロー基礎学ってなんなんですか？」

「今日のヒーロー基礎学はレスキュー訓練だ。…それがどうした。」

「いえ、今日の占いで良くないことが起こると出てきたんで、ちよつと気になったんです。…何も無いとは思いますが一応気をつけてください。」

「俺は占いか信じないタイプなんだがな。…だが、お前の個性の練度は評価している。心の中に留めておく。」

「先生ってデレることあるんすね。」

「…阿保なこと言つてないで席に戻れ。そろそろ授業始まるぞ。」

そして昼過ぎ、ヒーロー基礎学の時間がやってきた。予定通り、オールマイトが遅れていて、13号先生の演説が始まった。

「…君たちの力は人々を傷つけるためじゃない。助けるためにあるのだと心得て帰ってください。…清聴、ありがとうございます。」

「よし、じゃあまずしは…」

「先生…占いが当たった。」

僕は相澤先生にドームの中を指しながら危険を知らせた。

「…!？」

「なんだあれ、また入試の時みたいにもう始まつてるパターン？」

「違う!!…あれは、敵だ!…全員動くなよ!!13号!生徒を守れ!」

「13号にイレイザーヘッドですか。先日頂いた教師側のカリキュラムにはオールマイトがここにいるはずなのですが…」

「この前のクソども!!…これが狙いだっただのか!」

「どこだよ。せつかく大勢引き連れてやってきたのにさあ…オールマイトがいないなんて…」

そこで、俺と目が合った。…いや、あつてしまった。

「おめえは!あんときのガキ!なんで生きてやがる!!イレイザーと戦つてるときに死んだはずだろ!!」

「さあて…なんでかなあ」

死柄木は驚愕していたが、俺も同じくらい、いや、それ以上にびつくりする光景が目の前にあった。

「…シニスターの連中!?!なんであつちの世界にいるはずの敵たちがこつちにいるんだよ!?!」

「私が連れてきたのさ。魔術師の弟子よ」

「…ロキ!?へえ覚えててくれたんだ。光栄だね、あんたみたいな神に覚えててもらえたなんて。…それよりも、あんた並行世界移動できる術持ってたんだな。」

僕がいるせいでかなり変わっちゃったなあ…敵連合の連中だけなら何とかかなりそうだったんだけど、シニスターの連中やらロキがいるならぶっちゃけオールマイトが来ても覆りそうにないんだけど…主にロキのせいで。

アベンジャーズに連絡しなきゃまずいかも…

「アベンジャーズに連絡しても無駄だぞ。こちらの世界とあちらの世界を分断したからな。何、安心しろ。分断したといっても数日の間だけだ。まあ、その頃にはすべて終わっているだろうがな」

…いやかなりまずいわとりあえず魔術で無理なら科学の力で連絡してみよう。そのための時間稼ぎをしなきゃ!

「なにが目的なんだ?」

「こちらの世界には父上や兄上のような存在はいない。…つまり!私の邪魔をする奴ら!邪魔できるヤツらはいないって事だ!私はこの世界を支配する!!」

「そんなことさせるわけねえだろ(ないでしょうが!!)!!」

雄英高校と敵連合の戦いが始まった。



ていうか先生たち、俺らの会話聴いてたのか…。まあそりゃあそうか。更には言えば相澤先生が後で話があるって無言で訴えてくる。

…怖い。